

【第20回聖路加看護学会学術大会：大会長講演】

聖路加国際大学と病院の変革

——大学に焦点を合わせて——

松谷 美和子

I. はじめに

まず、記念すべき第20回聖路加看護学会学術大会の開催の機会をいただいたことに感謝を申し上げます。前半で筆者がこれまで学んできたことについて述べ、後半では大学の変革について説明したいと思う。

II. これまで学んできたこと：視点、聴く力、自律、看護の本質と教育

1. 視点

これは、米国ピッツバーグ大学看護学部修士課程での臨床経験からの学びである。7歳になるシャイな少年ハリ（仮称）は、尿道下裂の3回目の手術を受けるために入院していた。この時期、子どもは自分の身体への敏感さが高まっており、侵襲的な処置には極めて敏感である。こうしたことは日米共通である。ハリは3度目の手術が成功すれば、立位で排せつできるようになる。入学を控えたハリにとって、立位で排せつできるか否かは極めて重要であった。尿道末端の敏感な部分へのハリの警戒は半端ではなかった。ハリとの病棟での日々を記述し、分析しては提出する日々であったが、自分が行ったこと、ハリの反応、これをつぶさに記述し、洞察する。この繰り返しから、相手の視点をもつことの重要性を学んだ。

いまを生きる7歳のハリにとっては、わが身の一部たりとも損なわれないことが最大の関心事であった。患者にとっての治療の成果は非常に重要な人生の岐路となる。ハリの両親にとっての最大の関心事は、その治療がどの程度の成功をわが子にもたらすかであり、それこそが問題であった。これ以降、「視点」は筆者の思考の軸のひとつとなっている。

“心の理論”には、博士課程在学中に興味をもった。ヒトはいつごろから、自分や他人の考えていることが理解できるようになるのか。ヒトが、自分の視点を保留したまま、他者の視点で推論できるようになるのは、いつごろかという問いを立てた実験が幼児を対象に行われていた。心の理論の哲学的基礎を、子安（1997）は、理論説

とシミュレーション説に分けて説明している。他者の心を理論的に理解することが必要であるとする立場が理論説、他者を理解するためには、まず、自分が相手の立場だったらどうするだろう、どう感じるだろうと考え、それを相手の心のシミュレーションとして用い、相手の心を理解するのだとするのがシミュレーション説である。

大学院での論文指導をするようになって、心の理論を思い起こすことがあった。他者の視点をもつことは、共感をケアそのものとして、あるいは技のひとつとして重視している看護にとって非常に重要なテーマである。当時博士課程に在学していた林智子は、「相手の身になって考える」ことが可能か、「汝の欲するように相手にも施せ」は看護としての確かとといった問いを携えていた。この根本的な問いから、やがて視点取得という概念を用いた看護研究に着目した。そして、『『患者の立場に立つ』ことを看護師の専門的な思考方法として確立していく手がかりをつくる』（林、2012）のために、林は実験研究を行った。結果は論文をお読みいただきたい。筆者はこの林の研究から思わぬこぼれ球を拾った。筆者にとって輝き続ける発見であった。それは、相手を理解しようという矢印なしには、共感も生まれえないということである。相手を理解しようという矢印は、相手への誠実な問いとなり、相手のことばや表情などの表現を拾い、真剣に聴こうとする。それを意図的にできるか否かが問われる。これが聴く力、語ることの重要性への気づきにつながっていくと筆者は考える。

2. 聴く力：語ることの重要性

患者が前向きに生きていく姿勢を行動に移すようになるのを支えるステップとして、語る事が重要であること、語るには相手が必要であることを自らの経験から強く認識した。聴く立場に立つ人は、看護師でなくともよいのであるが、相手が慢性的な経過をたどる病をもち、なかなか立ち上がれないでいる場合、その相手に関心をもち、相手を理解しようと耳を傾け、相手の自己啓発を期待する技術を看護師がもっていたら、救われる人は多いであろう。

3. 自律

自律はいきいきするための必要条件である。これは、

Nurse Practitioner (以下, NP) のコリーンから学んだことである。コリーンはオレゴン・ヘルスサイエンスセンターのクリニックで働く NP であった。彼女は20人の医師らと共に高齢者の外来診療を担っていた。1人当たりの診療時間は約10～40分であった。コリーンのもとには元医師や元看護師など多彩な患者が外来診療を希望してやってきた。5人ほどの家族につき添われた認知症高齢者もいた。

コリーンは、患者個々の診療記録であるマイチャートをレビューし、コールのかかった診察室に向かう。患者や家族にあいさつし、バイタルサインズのチェックと診察を行い、対話が始まる。療養生活はうまくいっているか、薬は飲んでいるか、その作用は生活にどのように表れているかなど、薬の名前と作用を家族に確認しながら、ていねいにひとつずつたずね、同時に記録していく。

薬が複数のクリニックから処方されている場合は、処方箋を見せてもらい、関連する薬を統合しミリ単位で調整する。主治医が処方した基礎疾患の治療薬の変更や調整は主治医に電話等で相談する。患者のQOLに着目したやりとりが中心になり、散歩などの運動、食事、薬を飲む時間と排せつや睡眠の関係など、カテーテル挿入部のケアのこと、患者のニーズにきめ細かく応じるために、推論し、対話し、そして判断する。

このような診療で患者の満足度は高く、それは彼女のやりがいにつながっていた。健康管理を自律的に行う患者を支援する方向で診療が行われ、やりとりのうちに、患者のヘルスリテラシーが高められていることがわかった。自分の健康を自分で律する喜びをコリーンは仕事を通して人々に与えていた。

4. 看護の本質と教育

現在の筆者の専門領域は看護教育学である。毎年新しい大学院生を迎え、看護の機能の中心は教育であることを伝えている。教育学者である寺崎弘昭 (1994) は、教育ということばのルーツを啓蒙思想家ルソーにたずね、教育本来の意味を見いだしている。ワローはいう、産婆は引き出し、乳母は養い、師傳はしつけ、教師は教える (表1)。

教育 education の系譜をたどっている寺崎 (1994) は、ルソーの『エミール』(1762) に引用された古代ローマの学者ワローのことばをとりあげている。ワローの用いた *educit*, *educat* という語は、教育に相当する英語 education の語源であろう (略)。つまり、教育 education は、引き出し育てることを意味し、これを担っていたのが、看護職者の系譜に属する産婆であり乳母である。このように、教育的機能は、古代より看護の機能であり、潜在力のある存在を外界へと導きだし、ひとり立ちできるまでに育てることである。看護行為の方向性を見極めるとき、教育的機能こそが看護の中核となる機能であるということが出来る。(松谷, 2012: 106)

引き出し育てることの喜び、人の成長と自律を願う看護、これまで看護を通して学んできたことが、いまようやく未来の看護系大学教員育成事業へと結実しようとしている。

Ⅲ. 聖路加国際大学の変革：カリキュラムの刷新、未来の看護系大学教員の育成、今後の課題

大学となって50年の節目となる2014年4月に聖路加看護大学は聖路加国際大学と名称をあらため、法人組織による病院との一体化を成就、校名に国際の文字をいれ、グローバル時代を意識した大学へと船首を向けた (表2)。組織が一体化したことによる教育内容の大きな変化のひとつは、実習の充実である。大学側の変革を報告し、みえてきた課題と今後の方向を探求したいと思う。

1. カリキュラムの刷新

大学は病院との一体化により実習をより充実させることを目指して、実習科目を配置した。具体的には、次のステップで構成している。①実習に入る前のサービス・ラーニングの導入によるコミュニケーション能力の強化、②基礎看護学を学んだ学生が行う初めての看護実習 (レベルⅠ)、③各看護領域の学修を系統的に行う臨地実習 (レベルⅡ)、④臨地実習を終えた学生が領域を選択し、関心のある領域で卒業研究課題を見だし、取り組んでいくための課題探究実習、⑤それまでの学修内容を統合して行う実習 (レベルⅢ)、⑥探究したい課題を事例で深める卒業研究、⑦学生から新人看護師への移行をス

表1 ルソーが引用したワローのことば

Edsit obsetrix, dit Varron ;
Educat nutrix,
Institut paedagogus,
Docet magister.

(Rousseau J (1964) : Emile ou de l'education. 12, Garnier Frères.)

表2 聖路加国際大学の変革

[意識] 看護学部教育力の客観的視点の獲得
Making a difference
理論と実践のギャップの認識の共有

[ソフト] 大学と病院の協働体制基盤の構築
学校法人としての組織の整備とガバナンス改革
教育・研究・社会貢献機能の最大化の実現へ
学生支援体制強化
危機管理体制強化
研究支援体制強化
地域社会貢献体制の構築
学部実習協働体制整備
自己点検評価体制強化 (マイクロ～メゾ・マクロ)

[ハード] 教育設備の改良

ムーズにする卒業実習チームチャレンジである。

これらをすべて履修すると実習単位数は34単位となる(表3)。大学と病院の一体化に伴う変革は、実習科目の配置の工夫と充実、グローバル化を認識した科目の増設、超高齢社会を意識した科目の設定として新カリキュラムに反映された。

2. 未来の看護系大学教員の育成

大学は臨地実習の充実を、病院はよりよい看護ケアの提供を図りたい、双方の望みを実現するため、大学はクリニカル・ナースエドゥケーター(以下、CNE)の育成に、聖路加国際病院はCNEの活用を含む3ステージ①各部署に学部実習担当者を配置し、「学部実習担当者」「看護スタッフ」「教員」の各役割を明文化し、実習効果を最大にするための土壌作りを行う、②CNEの役割を明

文化し、看護師教育の中心的な存在として組織上に位置づける、③CNEによる看護師の実践能力の向上のための自己研鑽システムを構築する)に着手した。

CNEは臨地に軸足をおく教員として2014年から聖路加国際大学大学院、看護教育学上級実践コース(CNEコース)で育成を開始している。CNEコースは、保健師、助産師、あるいは看護師として5年以上の経験があり、実習指導・研修・自己研鑽に関心のある者を対象としている。

本コースは、未来の看護系大学教員を育てるフューチャー・ナースファカルティ(以下、FNF)育成プログラム事業に位置づけられている。この事業は、看護系大学教員養成事業として文部科学省の助成を受けたもので、今年度で3年目となる。未来の看護系大学教員は、実践力に優れた臨床に軸足をおくCNEと、研究力に優れた研究教育者の両者を指す。FNF育成プログラムは、これらの育成のため、修士課程・博士課程の全学生を対象に、教育力・研究力・社会貢献活動力の開発支援を行っている(図1)(松谷ら, 2015)。

CNEコースの目標は、必修科目32単位、選択科目9単位以上を履修するコースで、修了時までにEBN実践基盤と看護学生および看護師への教育基盤となる資質・能力を修得することを目指している(表4)。看護教育学20

表3 カリキュラムの刷新：実習科目の強化

学年	実習科目	単位数(選択)
1年生	コミュニケーション実習	1
	サービスマニカリング	(2)
2年生	基礎看護技術実習	1
	看護展開論実習	2
3年生	小児看護学実習	2
	周産期看護学実習	2
	成人看護学実習(急性期)	2
	成人看護学実習(慢性期)	2
	老年看護学実習	3
	精神看護学実習	2
	地域・在宅看護学実習	2
4年生	課題探究実習	(4)
	総合実習	3
	卒業研究	3
	卒業実習チームチャレンジ	(3)

表4 看護教育学上級実践コース(CNEコース)(修士課程)

〈学修目的〉	EBN実践基盤と看護学生および看護師への教育基盤となる資質・能力を修得する
〈学習目標〉	根拠に基づく臨床判断ができる 看護ケアの質を改善できる 学生および看護スタッフの教育に関するリーダーとして機能できる 看護系大学教員と連携し、看護実践・教育・研究の連関を強化・促進できる

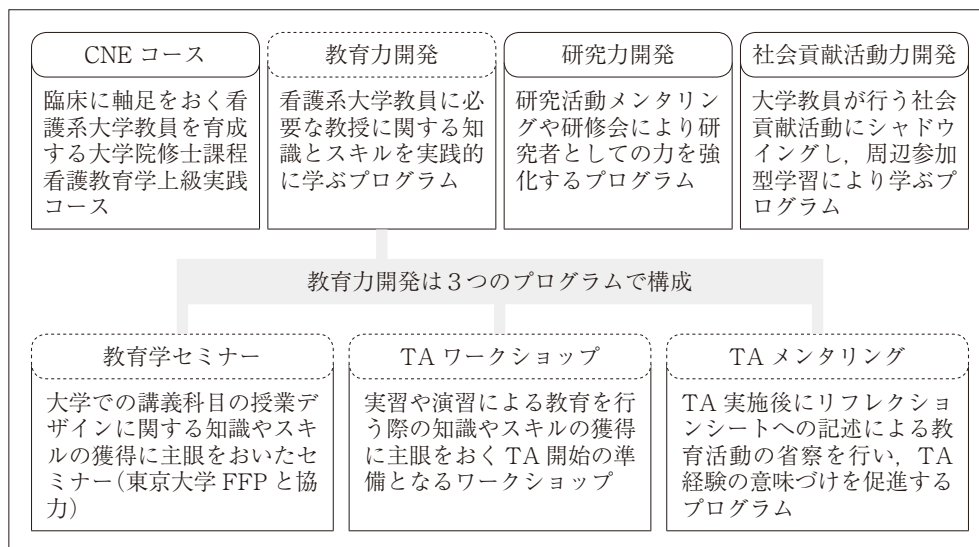


図1 FNF育成プログラム

単位のほかに、看護理論や研究法、看護管理学、急性期看護学などの各自の専門分野の特論等を履修することとしている。

看護教育学の演習や実習では、学部の2～4年までの実習科目や演習科目で教員役割を経験し、新人看護職を含む看護職者の現任教育の課題を調べ、研究的に取り組む。CNEコース修了生が、将来、看護職者の専門職性の育成に貢献し、間接的に看護の質の改善につなげることで、同時に、実践現場から研究課題を提言し、成果を教育に還元し、実践を変えていくこと、すなわち、実践と研究と教育のすべてに直接かかわる役割を果たす重要な存在になっていくことを期待している(松谷ら, 2014)。

3. 今後の課題

今後は、CNEと臨床現場との協働による看護師の専門職性の教育の実現を目指している。CNEは、教育の実践知を発信していくという役割をもつ。また、エビデンスの臨床応用を推し進め、エビデンスが明確でないものについては、実践研究を推進するという課題がある。これらの基盤には、看護職が専門職性を認識する必要がある。専門職性の認識は看護師を、自らの仕事を自らの努力で高めていこうとする存在へと押し上げる。専門職性をもって、実践の場や教育の場で、メンタリング文化を醸成しながらケアを改善していくサイクルをつくり、倫理的センスを高める営みを並行して進めていくことが求められていると考える。

IV. 終 章

看護は、“他の専門職の特徴を反映するハイブリットな専門職である”と『ベナー ナースを育てる』のまえがきにシュルマンが書いている。ときに弁護士のような役回り、あるいは教師、あるいは工学者、あるいは聖職者のような役割を担うのが看護師であると説明している。看護の機能を実に言い得ていると思う。

シュルマンは、看護という職業の複雑で豊かな特性として、目の前に注意を喚起する対象が同時に多数存在し、一対一の対応に優先順位の判断が継続的に求められる点^が、他の専門職と異なる点であると述べている。そして、擁護^{アドボケート}と医学、工学と神学、教育学とケアリングがハイブリットに組み合わせられた業である看護が、他の専門職の基礎教育より短くて実践にはいることができることは理解しがたいことだとしている。

看護の質を保つには数を必要とする。数を増やそうとすれば志願者の学力の幅が広がり、なかには高度な学習を続けることが困難な者がでてくる。高度な学習に耐えられる者が、看護という職業に魅力を感じ、多数志願してくるようになることを期待したいと思う。

引用文献

- Benner P, Sutphen M, Leonard V, et al.(2010) : *Educating Nurses : A call for radical transformation*, Jossey-Bass, Stanford.
- 林 智子 (2012) : “否認” という無意識の患者心理理解における看護師の思考過程分析 ; 患者心理推測から看護援助へ. *日本看護研究学会雑誌*, 35 (1) : 67-78.
- 子安増生, 木下孝司 (1997) : 〈心の理論〉研究の展望. *心理学研究*, 68 (1) : 51-67.
- 松谷美和子 (2012) : 看護の教育的機能. 小山真理子 (編), *看護師基礎教育テキスト第4巻 看護の機能と方法*, 106-118, 日本看護協会出版会, 東京.
- 松谷美和子, 三浦友理子, 奥 裕美 (2014) : 看護系大学教員育成の新しい風 ; 聖路加国際大学のフューチャー・ナースファカルティ育成プログラム. *看護教育*, 55 (11) : 1042-1048.
- 松谷美和子, 奥 裕美 (2015) : 聖路加国際大学フューチャー・ナースファカルティ育成プログラム. *看護管理*, 25 (6) : 476-481.
- 寺崎弘明 (1994) : 17世紀イギリスにおけるヨーロッパ胎教論の一水脈 ; トマス・トライオンの教育思想. *東京大学教育学部紀要*, 34 : 1-20.